OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	日英語の再帰構文の受動化に関する一考察
Author(s)	小薬, 哲哉
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57277
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

日英語の再帰構文の受動化に関する一考察

小薬　哲哉

1. 序

(1)のように、形は他動詞文であっても、意味的に自動詞文としての性格を持つような表現が存在する。

(1)　John blamed himself.　／　太郎は自分を責めた。

この文は、「行為者の働きかけが自らに還ってくる」という意味的特徴をもつ。これは、再帰性(reflexivity)と呼ばれ、再帰性をもつ再帰構文(reflexive construction)の構文的な特性が注目を集めてきた。特に、形式的には他動詞文でありながら、その意味は自動詞文に近く、その証拠として、受動化ができないと指摘された。

(2)　*　John was blamed by himself. ／　*　太郎は自分によって責められた。

このことから、再帰構文は、他動性に関して他動詞文と自動詞文の中間的存在と考えられてきた(Hopper and Thompson 1980 など)。

本稿では、再帰構文の他動性について詳細な考察を行い、実際には特定の条件の下で受動化が可能であることを示す。そして、再帰構文の構文的特性と受動構文に課される特性との相関関係から再帰構文の受動化に対して、原理的な説明を与えることを試みる。

2. 再帰構文の構文的特性

2.1. 再帰動詞・再帰用法

まず再帰構文とは何か、その構文的特性について概観しよう。再帰構文に生起する述語には、再帰的意味しかもたないタイプと、再帰的意味とは別に、他者への働きかけを行う他動詞的な意味も表せるタイプの二つがある。前者は「再帰動詞(reflexive verb)」、後者は「再帰用法(reflexive use)」の述語と呼ばれる。英語の再帰動詞は、再帰代名詞の生起が義務的である(3a)。また、自らの身体部位を義務的に選択する再帰動詞もある(3b)。

(3) a.　The witness perjured {himself / *Mary}.　(Safir 2004:122)

b.　Alice shrugged {her / *his} shoulders.

一方で、以下は、他動詞的な意味を表すこともできる述語の再帰用法である。

(4) a.　John blamed himself.　／　John blamed Bill.

b.　Mary waved her hand.　／　Mary waved the flag.

日本語の場合、仁田(1982)によれば、着脱動詞「着る」「履く」「浴びる」などが、必ず主体自らへの着脱を表し、他者への着脱を表さないことから、再帰動詞とされる (同:79-80)。

(5) a.　その男はエナメルの靴を履き派手な背広を着ていた。

b.　彼は入浴後いつも冷水を浴びることにしている。

これに対して、「責める」や「(手を) 振る」は、(6)のように主体の働きかけが他者へ及ぶ他動詞的用法も可能であることから、再帰用法である。

(6) a. 太郎は自分を責めた。　／　太郎は花子を責めた。
b. 次郎は手を振った。　／　次郎は旗を振った。

本稿では、再帰動詞だけでなく再帰用法の場合も再帰構文と呼び、考察の対象とする。すなわち、再帰的解釈が可能な構文形式を再帰構文とする。

2.2. 再帰性を構成する要素−Kemmer (1993) の考察から

次に、Kemmer(1993)の研究を参考にしながら、構文的特性である「再帰性」について考察しよう。先行研究では、再帰構文における二つの項の同一性こそが、重要な特徴であると考えられてきた。例えば、Faltz(1977:34) は、「再帰の本質は、同一指示(coreference)である」と述べる。Kemmer(1993:44)でも、同一指示関係を、プロトタイプ的な再帰事象(reflexive event)を成立させる重要な特徴の一つと捉えている。

さらに、二つの参与者のうち、事象の成立に関して、始点となる参与者を Initiator、終点となる参与者を Endpoint と名付けている。事象の成立に関する始点や終点とは、典型的には動作主と被動作主(e.g. John hurt himself の John と himself)、あるいは物理的な働きかけのない、例えば知覚事象の経験者(experiencer)とその対象である刺激(stimulus)(e.g. John saw himself の John と himself)のこともある(Kemmer 1993:51)。

本稿でも、参与者同士の同一性を、再帰構文の重要な構文的特性の一つと捉える。但し、その同一性は厳密に同一と言えるものばかりではない。「手を振る」「眉をひそめる」のような、身体部位名詞を伴う再帰構文においては、その身体部位は、動作の主体と完全に同一ではなく、一部として解釈される。それは、帰属先である主体とメトニミー関係にあり、結局は同一事物を含意し、再帰的な出来事を表すのである (4.1 節も参照)。[1] このように、身体部位名詞も再帰代名詞と同様、先行詞が指す実体と同一の実体を表すことで再帰的解釈をもたらすことから、厳密な同一性ばかりではなく、緩やかな同一性も関与する。

再帰性を構成する第二の要因として、Kemmer(1993)は再帰性が生じる文の範囲 (scope) を挙げる。Faltz(1977)が述べるように、プロトタイプ的な再帰事象は、主節一文によって描写される単一の事態である。本稿でもこれに倣い、典型的な再帰構文を「単文が表す事態に関与する」文として、範囲を限定する。

さらに第三の要因として、Kemmer(1993)は二つの参与者が担う主題役割の重要性を指摘する。典型的な再帰事象において、同一となる参与者は、動作主(agent)と被動作主(patient)である(Faltz 1977:3)。これは、出来事を開始する参与者が、その行為によって影響を受けるプロトタイプ的な再帰事象であり、Kemmer(1993)は「直接再帰(direct reflexive)」と呼ぶ。

一方で、動作主との同一性をもつ参与者が、被動作主以外の役割を担う場合も、再帰事

[1] 実際、Faltz(1977)が指摘するように、身体部位が再帰代名詞としての機能をもつ言語もある (例えば、Basque 語や Fula 語、Hausa 語、Tamazight 語は「頭」を意味する形態素を用いる)。また、3 節で見るように、身体部位の再帰構文は典型的な他動詞文よりも他動性が低いという特徴を示す。これらのことから、再帰代名詞だけでなく身体部位名詞も同一性の基盤となり、これによって当該事態の二つの参与者間に同一性の関係が成立することが分かる。

象を表すことができる。

(7) a. Mary gave herself a nickname.
b. John bought a cake for himself.

(8) 太郎は、(上半身から)毛糸のセーターを脱いだ。

これらの再帰構文は、Kemmer が「間接再帰 (indirect reflexive)」 と呼ぶ事例である。動作主と同一の実体を表す参与者が、直接影響を受ける被動作主ではなく、動作主の働きかけが被動作主に及ぶことで間接的に影響を受ける参与者、例えば、着点(goal)(7a)や受益者(beneficiary)(7b)、または起点(source)(8) の場合もある。

以上、Kemmer(1993)の分析を基に、再帰構文の再帰性を構成するとされる要因を概観してきた。まとめると、次の三つになる。

(9) a. 二つの参与者の同一性（identity of two participants）
b. (a) が単一の事象内で成立するのか、複数の事象にまたがって成立するのか
c. (a) を言語化する項の主題役割

Kemmer(1993)の知見を踏まえ、本稿では再帰構文を次のように規定する。

(10) 当該事象に参与する参与者のうち、始点参与者と終点参与者が同一性をもつような単一事象を表す構文

また、(9) を参考にして、本稿で扱う再帰構文を以下の三つに下位分類する。

(11) 直接再帰構文(direct reflexive construction)
a. John blamed himself.
b. 太郎は自分を責めた。

(12) 身体部位再帰構文(body-part reflexive construction)
a. Kate waved her hand.
b. 花子は手を振った。

(13) 間接再帰構文(indirect reflexive construction)
a. Bill bought a hat for himself.
b. 次郎は自分に帽子を買った。

4 節では、上記の再帰構文の受動化について、具体的に議論していく。そのために、まず受動構文として成立するための条件を考察する。

3. 他動性と受動化の制約—参与者の個別性

再帰構文、および受動構文の研究において、他動性の概念が非常に重要な役割を果たす。Hopper and Thompson(1980)では、他動性とは二者択一的な特性ではなく、他動性の高い出来事から低い出来事まであり、それには、表 1 の 10 のパラメータが関与すると提案する(A は他動詞文の主語、O は目的語を表す)。表 1 では、左側の項目を満たすほど受動文になりやすく、右側の項目が当てはまるほど、受動文になりにくいということになる。

		HIGH	LOW
A	PARTCIPANTS	2 or more participants, A and O	1 participant
B	KINESIS	action	non-action
C	ASPECT	telic	atelic
D	PUNCTUALITY	punctual	non-punctual
E	VOLITIONALITY	volitional	non-volitional
F	AFFIRMATION	affirmative	negative
G	MODE	realis	irrealis
H	AGENCY	A high in potency	A low in potency
I	AFFECTEDNESS OF O	O totally affected	O not affected
J	INDIVIDUATION OF O	O highly individuated	O non-individuated

表 1　他動性パラメータ (Hopper and Thompson 1980)

一方で、再帰構文はどちらに位置づけられるであろうか。1 節でも述べたように、Hopper and Thompson(1980:277-278)は、様々な言語の形態論的証拠を挙げつつ、再帰構文が、他動性の高低を両極とする中間に位置づけられると述べている(同様の指摘は、仁田 1982、ヤーコブセン 1989 ほか、多くの研究に散見される)。中間に位置付けられるとすれば、再帰構文が受動化できないという先行研究で広く観察されてきた事実はどう捉えられるだろう(Postal 1971、Pesetsky 1995 など; 仁田 1982、天野 1987 など)(cf. 細川 1990)。

(14) a. *John was blamed by himself.
b. *太郎は自分に (よって) 批判された。

(15) a. *Her neck was craned by Jennifer. (Levin 1993:221)
b. *手は彼によってさかんに振られている。 (仁田 1982:87)

(16) a. *John was given a book by himself. (Pesetsky 1995:107)
b. *毎朝シャワーは彼によって浴びられる。 (仁田 1982:83)

(14)から(16)の事実に対して、生成文法理論の枠組みでは、再帰代名詞や束縛変項に関する分布を規定する束縛条件違反による説明が主流であり、一方日本語文法研究の領域では他動性の低さという受動文の意味的制約の違反による説明が提案されてきた。

本稿では、後者の意味論的アプローチの立場を取る。特に、(10)で述べた、「始点参与者と終点参与者の同一性」という意味的特性が、受動文が求める他動性パラメータ (J)「目的語の個別性」に違反しているため、受動化できないと主張する。受動文が表す典型的な意味は「何らかの原因によって、ある実体が影響を被る」ということであり、従って描写される出来事には、少なくとも二つの参与者が関与しなければならない。これに対し、再帰構文は、参与者の同一性によって目的語の個別性が低く、互いに相容れないのである。

しかしながら、参与者の個別性に基づく分析を踏まえると、ある一つの予測が立つ。もし、何らかの要因によって、目的語参与者が始点参与者とは別個の独立した実体として解釈される時、受動化が可能となる。実際、この予測の妥当性は、経験的に裏付けられる。

4. 日英語の再帰構文と受動化

4.1. 再帰構文における参与者個別性のスケール

受動構文として成立するためには、他動性パラメータ、特に終点参与者の個別性の高さを満たすことが重要である。従って、再帰構文の受動化を考察するにあたり、各構文の終点参与者の個別性を詳細に考察することが必要である。それぞれ、順に見ていこう。

まず、直接再帰構文である。(17)のような直接再帰構文では、始点参与者である動作主と終点参与者である被動作主が同一の実体を表す。この同一性は、英語では-self 形の再帰代名詞、日本語では「自分」によって標示される。

(17)　John blamed himself.　／　太郎は自分を責めた。

Kemmer(1993:71)では、直接再帰構文が表す事象構造を、図 2 の事象スキーマで分かりやすく表している (見やすさのため、参与者を表すアルファベット記号を一部変更している)。

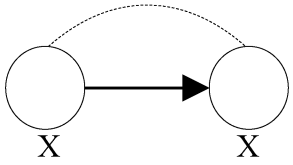

図 1　直接再帰構文の事象スキーマ(Kemmer 1993:71、一部変更)

図 2 では、左側の円が始点参与者を表し、右側が終点参与者を指す。参与者間の働きかけを矢印で示し、両者の同一性を点線で表している。この図が示すように、直接再帰構文は、二つの参与者が完全な同一性をもった事態を表す。

次に、身体部位再帰構文を見よう。(18)(19)の例のように、動作主が行う行為の対象が、動作主自身の身体部位であり、その動きや変化が身体部位に及ぶことで、結果として動作主自身にもそれが及ぶことになる。

(18)　Kate waved her hand.　／　花子は手を振った。

(19)　John washed his hair.　／　太郎は髪を洗った。

身体部位再帰構文が描写する事態は、Kemmer(1993)の図 2 を基に、以下のような事象スキーマで表すことができる。この図では、始点参与者と身体部位の所有者として含意される終点参与者が同一であることを、左側の実線の円と右側の破線の円で表している。

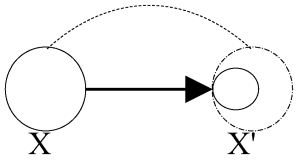

図 2　身体部位再帰構文の事象スキーマ

また、所有者と身体部位の関係を二つの円の包含関係で表している。この関係の重要性を強調しておきたい。所有者参与者と身体部位は全体と部分の関係になっており、そのことは当該構文の重要な意味特性の一つとなっている。それは、have a cold や have a sister のような分離不可能所有関係を表す構文と並行的な特性である。主語と分離不可能所有関係にある名詞句は、定性効果を示し、また定の代名詞で照応もできない。

(20) a.　John has {a / *the} sister.

b. *John had a cold yesterday, but someone else has it now.

(21) a.　She shrugged {her / *the} shoulders.

b. *John waved a hand at me and Bob waved it, too.

c. *彼女は昨日「知らない」と肩をすくめた。今日も、それをすくめるだろう。

このように、身体部位再帰構文において、動作主の働きかけの対象となる身体部位は、形式上はあたかも始点参与者と独立した存在かのように描写されるが、実際には、始点参与者の分離不可能な一部として解釈されるのである。ここに形式と意味のミスマッチがある。

身体部位再帰構文は、始点参与者そのものではなく、その一部である身体部位を言語化することから、直接再帰構文よりも目的語の個別性が高い。しかし、その身体部位は意味的に独立した存在ではないため、次に見る間接再帰構文と比べると個別性は低い。

最後に、間接再帰構文の例である。間接再帰構文には、少なくとも三つの参与者が関与する。(22)では、動作主の「買う」という行為は、対象(theme)である目的語参与者に向かう。この結果、対象が動作主に所有されることが含意され、動作主の働きかけが間接的に自らに還ってくる。このように、間接再帰構文では、受益者や着点が終点参与者となり、始点参与者である動作主と同一性をもつことで、再帰性が成り立つのである。

(22) a.　Bill bought a hat for himself.

b.　次郎は自分に帽子を買った。

間接再帰構文が表す事態において、中間的な位置を占める目的語参与者は、始点である主語参与者から完全に独立した、別個の個体を表す(例えば(22a)の a hat)。このため、三つの再帰構文の中で最も個別性が高く、従って他動性も高いと言える。Kemmer(1993:77)は、(22)のような間接再帰構文が表す出来事を、図4のような事象スキーマとして表している。

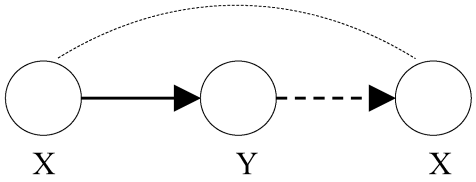

図3　間接再帰構文の事象スキーマ(Kemmer 1993:77、一部変更)

図 3 では、実線矢印で示された始点参与者((22a)の Bill)からの働きかけが、中央の円で表された対象((22b)の a hat)に及び、その結果、所有権の移行が点線矢印で表されている。

以上、目的語の個別性という観点から、各再帰構文の事象スキーマ、及び他動性を考察した。本稿の考察から、各構文の個別性を次のようなスケール上にまとめることができる。

	Two-Participant Event	Indirect Reflexive Event	Body-part Reflexive Event	Direct Reflexive Event	One-Participant Event
Individuality					
+	――				−

図4　再帰構文と参与者個別性のスケール

4.2. 再帰構文の受動化の成立条件

4.2.1. 間接再帰構文の受動化

次に、目的語参与者の個別性の違いを基に、再帰構文の受動化がどのように可能となるのかを考察する。4.1 節での議論に基づけば、再帰構文の中でも、目的語の個別性が最も高い、間接再帰構文が一番受動構文として成立しやすいと予測できる。間接再帰構文としてよく取り上げられる動詞に、(i)「衣服の着脱」を表す動詞と(ii)give, buy, build のように「物の授与」に関する動詞がある。まず(i)から見ていこう。

日本語では、衣服の着脱を表す間接再帰構文の場合、衣服と動作主とはそもそも別個の独立した実体である。そのため他動性が高く、一般の他動詞文と同様に受動構文が成立する。但し、衣服の着脱行為は, 動作主の状態に焦点が当たり、その物自体に対して何らかの影響性を想定しにくい。このため、属性叙述受動文(益岡 1982)(23a)や、対象の変化を明示する補助動詞(23b)など, 語彙的・構文的支えが必要になる。

(23) a. 森尾氏のデザインした服は, 彼が意図したのよりも若い年齢層によく着られている。 (天野 1987:5)

b. 部屋一杯に服が脱ぎ散らされていた。 (細川 1990:640)

確認されるデータを見る限り、英語の着脱動詞についても同様のことが言えそうである。

(24) The classic cowboy hat has been worn by cowboys, like Buffalo Bill and Roy Rogers ... (Erika Stalder, *Fashion 101*)

従って、このタイプは一般的な他動詞文と並行的な他動性を持つと言えるであろう。

次に、物の授与を表す間接再帰構文を見る。ここでは、give と buy の対比を見るに留める。興味深いことに、give の再帰構文の受動化は容認されないが、buy は容認されやすい。

(25) a. *These books were given to the girls by themselves. (Pesetsky 1995:107)

b. *この本は、太郎によって自分自身へと与えられた。

(26) a. And while he admits taking part in the office pool, he insists the winning ticket he purchased at a Queens supermarket was bought for himself. (*New York Daily News*, April 21, 2005)

b. Those tapes seem to have been bought by Ed for himself. (Postal 2004:259)

c. このお菓子は、花子によって自分自身 {*に / のために} 買われた。

この容認性の差は、give と buy の着点指向性 (goal orientedness) の違いから説明できる。Rappaport Hovav and Levin(2008:146)によれば、give 類の動詞は、使役所有(caused possession)を表し、例え to-与格構文であっても授受行為の達成を含意する(27a)。しかし、Oehrle(1976:104)によると、buy の場合には達成の含意をキャンセルできる(27b)。

(27) a. *My aunt gave some money my brother for new skis, but he never got it.

b. Originally, I bought my wife this tea-kettle, but I decided to keep it.

(27)の容認性の差は、着点への移動が意味論的に含意(entail)されるのか、それとも語用論的に含意(implicate)されているのかの違いと密接に結びついている。つまり、give の場合、

着点たる終点参与者が語彙的に焦点化される。終点参与者への授受行為の達成が焦点化されることで、始点参与者との同一性も焦点化され、受動化できないと考えられる。

しかし、buy の場合、(27b)のように終点参与者が焦点化されないため、結果として同一性も焦点化されず、(26)のように受動化が可能となる。(26c)の日本語の例も、直接的な受け手として与格で終点参与者を標示すると容認されないが、受益者を表す「のために」の場合には容認しやすい。この事実も、ここでの着点指向性の仮説を支持している。

4.2.2. 身体部位再帰構文の受動化

小薬(2010, 2012)において、身体部位名詞を伴う再帰構文の受動化の分析を行った。ここではその概要を簡単に述べながら、本稿での考察を踏まえた受動化の条件を示す。結論から述べると、身体部位再帰構文の受動化には、動作主の意味論的な抑制が必要となる。Givón(1981)によると、受動構文には、(i)被動作主の話題化、(ii)動作主の非焦点化、(iii)動詞の状態化(脱他動化)の三つの機能領域があるという。この(ii)の機能に特化した時、身体部位自体の個別性が焦点化され、受動化が可能となる。

動作主の非焦点化の条件として、二つの要因が存在する。一つは、提示文としての機能を果たす場合である。(28)では、身体部位再帰構文が受動化されている。その受動文は、談話において、発生する出来事に言及し、当該の状況全体を描写する役割を果たしている。

(28) a. As Clem got up to leave the kitchen, he noticed Paw and Dooley standing quietly in the doorway to the living room. Glances were exchanged, heads were nodded, and without a single spoken word, it was understood that a new set of ruby glass snifters would be acquired. (B. Hepburn, *The Back Roads of Eden County*)

b. 「… どうか真知子の為にも，お元気で…」春樹の手が大きく振られた。
(菊田一夫「君の名は」)

このような提示文は、Lambrecht(1994)によれば、動作主性の低い出来事としての解釈をもたらす。実際、by 句やニヨッテ句、動作主指向の副詞が共起できない。

(29) a. ??Heads were nodded in sympathy by John and Bill.

b. ??Hands were waved {carefully / deliberately}.

(30) a. ?*沿道からわざと手が大きく振られた。

b. ?*眉が熱心にひそめられていた。

提示文による非動作主的事態解釈によって、始点参与者の存在が背景化され、始点参与者に依存して存在する身体部位の個別性が高まるのである。

動作主の非焦点化の機能に特化し、身体部位再帰構文の受動化を可能とするもう一つの要因として、(31)のような、形容詞受身や連体修飾節による名詞前位修飾が挙げられる。

(31) a. His neck was craned throughout the lecture. (Bresnan 1982: 171, fn.1)

b. 敬子はよく梳かされた髪を上品に後ろにまとめている。 (松坂俊介「海響」)

これらの構文形式では、身体部位が被った結果状態を焦点化するため、当然動作主は描写

される事態の中に含意されず、非焦点化される。実際、Emonds(2006)などで観察されているように、形容詞受身のような構文は動作主の存在が含意されない。

(32) a. Our workers remain better paid (*intentionally). (Emonds 2006:23)

b. *自分によって、きちんととかされ整えられた次郎の髭

このような場合、定性効果が見られず、動作主の存在が非焦点化され、結果として身体部位が独立した存在として解釈されている事が確認できる。

(33) a. The eyes remained closed … (R. Whitlow, *Life Everlasting*)

b. 滋子と目が合うと，充血したその目が大きく見開かれ…

(宮部みゆき「模倣犯（下）」)

以上、身体部位再帰構文において、動作主の非焦点化の機能によって、その存在が背景化し、身体部位の個別性が高まることで、受動化が可能となるのである。

4.2.3. 直接再帰構文の受動化

最後に、直接再帰構文の受動化について考察する。直接再帰構文とは、上述の通り、始点参与者と終点参与者が完全に同一となる、最もプロトタイプ的な再帰事象を表す構文である。このため、再帰構文の中でも目的語の個別性が最も低く、従って最も他動性が低い。このため、受動化することは不可能であると考えられてきた。

しかし、Postal(1971)、Faltz and Oehrle(1987)などで、直接再帰構文の受動化が可能な例が指摘されている。(34)は、そのままでは容認不可能である。しかし、Faltz and Oehrle(1987)は、John が「John の石像」を指す文脈や、タイムマシンで年上の John が別の世界にやってきて若い John のヒゲを剃るような文脈では、(34)が容認可能となると観察している。

(34) John was shaved by himself.

これは、Lidz(2001)が"near-reflexive"と呼ぶ再帰代名詞の用法である。再帰代名詞が、先行詞の指示対象に類似・関連はしているものの、厳密には異なる指示対象を指すような用法である。この場合、厳密な同一性が成立しないため、直接再帰構文も受動化できるのである。次も同様の例である。

(35) a. Man is made and unmade by himself. (James Allen, *As a Man Thinkth*)

b. イミさんは罪の告白によって救われた (中略) 相手に対して罪の告白をするという、自分の行為によって、自分自身によって、救済されたのです。[2]

(35a)では、前の文脈において、「人々が普段考える思考や態度」の重要性が語られており、それが人間を形作り、破壊するということを述べている。ここでは、himself は"what he thinks"に書き換えられる。また、(35b)も「自分自身」がその直前の「自分の行為」を置き換えている。これらの例も、(34)と同様に、near-reflexive の解釈であることが分かる。

以上のように、直接再帰構文の受動化は、再帰代名詞の near-reflexive 解釈、すなわち厳密な同一性が回避され、終点参与者の個別性が際立つ場合に、可能となるのである。

---

[2] Google Web 検索(2016/04/20)。

5. 結論

本稿では、日英語の再帰構文の受動化について考察した。目的語参与者の個別性に基づいて構文を下位分類し、それぞれが受動構文として成立する条件を議論した。いずれの場合も共通しているのは、始点参与者と終点参与者の厳密な同一性を回避することが重要だということである。それを回避するための条件が構文ごとに異なるのは、参与者の個別性といった、それぞれが表す事象の性質によるものと考えられる。

本稿で提示した観察や分析は未だ完全なものではなく、また当該現象における日英両言語の細かな差異などの比較検討も十分なされていない。今後の研究課題としたい。

参考文献

天野みどり (1987) 「日本語文における＜再帰性＞について―構文論的概念としての有効性の再検討―」『日本語と日本文学』7, pp.1-9, 筑波大学.

Bresnan, Joan (1982) "The Passives in Lexical Theory," *The Mental Representation of Grammatical Relations*, ed. by J. Bresnan, 3-86, MIT Press.

Emonds, J. (2006) "Adjectival Passives: The Construction in the Iron Mask," *The Blackwell Companion to Syntax,* eds. by M. Everaert et al., pp. 16-60, Blackwell.

Faltz, Leonard M. (1977) *Reflexivization: A Study in Universal Syntax*, doctoral dissertation, University of California at Berkeley, Published by Garland, 1985.

Faltz, Leonard M. and Richard T. Oehrle (1987) "Multi-dimensional Compositional Functions and Referential Relations, " *Proceedings of the Sixth WCCFL*, pp. 63–75.

Givón, Talmy (1981) "Typology and Functional Diomains," *Studies in Language* 5-2, pp.163-193.

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56-2. pp. 251-299.

細川由起子 (1990)「日本語のいわゆる再帰動詞とその直接受動文について」, 崎山理他（編）『アジアの諸言語と一般言語学』pp.636-645, 三省堂.

Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice*, Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

小薬哲哉 (2010)「身体部位名詞を伴う再帰表現の受動文とその認可条件」『日本言語学会第 143 回大会口頭発表原稿』.

小薬哲哉 (2012)「身体行為構文の受動文と談話機能」*JELS 30*, pp. 111-117.

Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representation of Discourse Referents*, Cambridge: Cambridge University Press.

Lidz, Jeffrey (2001) "Anti-Antilocality," *Syntax and Semantics* 33, pp. 227-254.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, Chicago : University of Chicago Press.

益岡隆志 (1982)「日本語受動文の意味分析」『言語研究』82, pp.48-64, 日本言語学会.

仁田義雄 (1982) 「再帰動詞, 再帰用法―Lexico-Syntax の姿勢から―」『日本語教育』47, pp.79-90, 日本語教育学会.

Oehrle, Richard T. (1976) *The Grammatical Status of the English Dative Alternation*, Doctoral Dissertation, MIT.

Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*, Cambridge, MIT Press.

Postal, Paul (1971) *Crossover Phenomena*, NewYork: Holt, Rinehart, and Winston.

Postal, Paul (2004) *Skeptical Linguistic Essays*, New York: Oxford University Press.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2008) "The English Dative Alternations: The Case for Verb Sensitivity," *Journal of Linguistics* 44: pp.129-167.

Safir, Kenneth J. (2004) *The Syntax of Anaphora*, Oxford: Oxford University Press.

ヤコブセン, ウェスリー M. (1989)「他動性とプロトタイプ論」久野暲・ 柴谷方良（編）『日本語学の新展開』くろしお出版, pp. 213-248.